

『後山詩話』 訳注稿 (二)

北宋・陳師道 著

青木沙弥香・竹澤英輝・許山秀樹  
松尾肇子・三野豊浩・矢田博士 訳注

〔解題〕

前号に続いて、北宋・陳師道の『後山詩話』の訳注稿である。本号には、全八十四節のうち、第二十一節から第四十五節までを掲げる。

〔凡例〕

◇ テキストは、清・何文煥輯『歷代詩話』（中華書局、一九八一年四月第一版）を底本とした。

◇ 底本で校異が示されている部分については、原文に「校一」、「校二」……と付してその箇所を示し、【校異】の項目を設けて訳出した。

◇ 【訓読】の項目の書き下し文については、漢字の読み（ルビ）は現代仮名遣いを、送り仮名は旧仮名遣いを用いた。

二十一

永叔謂爲文有三多、「看多、做多、商量多」也。

【訓読】

永叔 謂おもへらく、文を為つくるに三つの多有り、と。「看みること多く、做なすこと多く、商量すること多し」なり。

【語釈】

\* 永叔：北宋・歐陽脩のこと。永叔はその字。

【通釈】

歐陽脩が評して言うには、文章を作る秘訣に、三つの「たくさん」がある、と。すなわち、「たくさん読み、た

くさん書き、たくさん考えること」である。

二十二

余以古文爲三等。周爲上、七國次之、漢爲下。周之文雅。七國之文壯偉、其失騁。漢之文華贍、其失緩。東漢而下無取焉。

【訓読】

余 古文を以て三等と爲す。周を上と爲し、七国は之に次ぎ、漢を下と爲す。周の文は雅なり。七国の文は壯偉なるも、其の失は騁なり。漢の文は華贍なるも、其の失は緩なり。東漢而下は取るもの無し。

【語釈】

- \* 七國：戦国時代の齊・楚・秦・燕・韓・魏・趙の七つの国を言う。
- \* 騁：奔放なさま。
- \* 華贍：文章が華やかで、意味の豊かなこと。
- \* 緩：弱々しいさま。

【通釈】

私は、いにしえの文は三つの等級に分けられると思う。周代の文は上であり、戦国時代の文はそれに次ぎ、前漢の文は下である。周代の文は典雅である。戦国時代の文

は雄壮であるが、その欠点は奔放なことである。前漢の文は華麗で奥ゆきがあるが、その欠点は柔弱なことである。後漢より後の時代の文には、取るべきものはない。

二十三

陳繹批答曾魯公表云、「爰露乞骸之請」。黄裳爲曾侍讀制曰、「備員勸講」。「乞骸」「備員」、乃表語、非詔語也。曾魯公謂人曰、「使布何所道」。

【訓読】

陳繹 曾魯公の表を批答して云ふ、「爰に骸を乞ふの請を露にす」と。黄裳 曾侍読の制を爲りて曰く、「員に備へて講を勸む」と。「骸を乞ふ」、「員に備ふ」は、乃ち表の語にして、詔の語に非ざるなり。曾魯公 人に謂ひて曰く、「布をして何れの道ふ所ならしむるや」と。

【語釈】

- \* 陳繹：北宋の人。神宗の熙寧年間に皇帝の秘書官の一つ、舎人院となつた。
- \* 批答：臣下の上奏文に対し、皇帝が意見を書いて答えること。またその文書。多くは皇帝の秘書官が代行した。
- \* 曾魯公：北宋・曾布のこと。妻の魏氏が魯国夫人に封ぜられた。曾鞏

の弟。紹聖元年に翰林学士から承旨に遷り侍読を兼ねた。ちなみに北宋で他に曾魯公と称された人に、魯国公に封ぜられた曾公亮がいる。ただし、曾公亮は元豊元年に八十歳で亡くなっていること、また後出の北宋・黄裳が元豊五年の進士であることなどから、ここでは時期的に合わない。

\* 乞骸：官の辞職を申し出ること。その身はすでに君主に捧げたので、その遺骸を賜って郷里に帰って葬りたいとの意から、そう言う。

\* 黄裳：北宋の人。神宗の元豊五年の進士。曾布と交流があったらしく、「曾魯公挽辞」という詩が『全宋詩』巻九四七に収められている。

\* 侍讀：天子や皇太子に講義する官。

\* 制：天子が出す命令。多くは臣下が代筆した。

\* 備員：定員に加えること。

\* 表語：「表」は、臣下が皇帝にたてまつる上奏文の一種。「表語」は、それに用いられる用語。

\* 詔語：「詔」は、皇帝が臣下に下す命令。「詔語」は、それに用いられる用語。

\* 使布何所道：「布」は、曾布のこと。この私をどちらの言っていることに従わせようとしているのか、の意。陳繹が代筆した批答に言うように、辞職することになるのか、それとも黄裳が代筆した制に言うように、侍読に配属されることになるのか、どちらの言葉に私は従うことになるのか、ということ言う。

【通釈】

陳繹は皇帝に代わって、曾布がたてまつった表について内容を吟味して答えて言った。「ここに辞職を願い出る旨がはっきり表れている」と。黄裳は皇帝に代わって、曾布を侍読に任命する旨の命令書を書いて、次のように

言った。「侍読の官の定員に加えて講義をやってもらう」と。「乞骸(辞職を願い出る)」や、「備員(定員に加える)」は、実は上表文の用語であって、詔勅の用語ではない。曾布が人に語って言うには、「いったいこの私をどちらの言っていることに従わせようとしているのだろうか」と。

二十四

詩欲其好、則不能好矣。王介甫以工、蘇子瞻以新、黃魯直以奇。而子美之詩、奇常、工易、新陳、莫不好也。

【訓読】

詩は其の好からんことを欲すれば、則ち好きこと能はず。王介甫は工を以てし、蘇子瞻は新を以てし、黄魯直は奇を以てす。而るに子美の詩は、常を奇とし、易を工とし、陳を新として、好からざるは莫きなり。

【語釈】

\* 王介甫：北宋・王安石のこと。介甫はその字。

\* 工：ここでは、工夫、技巧の意。「上手だ」の意と区別するため、訓読では「工」と読んでおく。

\* 蘇子瞻：北宋・蘇軾のこと。子瞻はその字。

\* 黄魯直：北宋・黄庭堅のこと。魯直はその字。

\*子美・唐・杜甫のこと。子美はその字。

【通釈】

詩はよいものにしよと思つて作つたならば、結局はよいものにできない。王安石は技巧で詩を作り、蘇軾は斬新さで詩を作り、黄庭堅は奇抜さで詩を作つた。しかしながら杜甫の詩は、普通のを奇抜なものにし、平易なものを技巧的なものにし、陳腐なものを斬新なものにするなど、よくないものはない。

二十五

熙寧初、有人自常調上書、迎合宰相意、遂丞御史。蘇長公戲之曰、「有甚意頭求富貴、没些巴鼻使姦邪」。「有甚意頭」「没些巴鼻」、皆俗語也。

【訓読】

熙寧の初め、人の自ら常に上書を調べ、宰相の意に迎合し、遂に御史を承くる有り。蘇長公之に戯れて曰く、「甚の意頭有りてか富貴を求むる、些かなる巴鼻も没くして姦邪を使にす」と。「甚の意頭有り」、「些かなる巴鼻も没し」は、皆な俗語なり。

【語釈】

\*熙寧：北宋・神宗の年号。この時期、王安石が宰相となり、新法が行われていた。ちなみに、蘇軾は新法には批判的な立場をとっていた。

\*御史：役人の不正などを取り締まる官。

\*蘇長公：北宋・蘇軾のこと。南宋・胡仔の『苕溪漁隱叢話』後集卷三十一「東坡」に以下のように言う。——當時以東坡爲長公、子由爲少公。

〔當時 東坡を以て長公と爲し、子由を少公と爲す〕。——「子由」は、蘇軾の弟、蘇轍のこと。子由はその字。

\*有甚意頭：何のもくろみがあつて、の意。「甚」は、疑問詞「何」と同意で、口語的な言い方。「意頭」は、考え、もくろみ、の意。

\*没些巴鼻：わずかの根拠もない、の意。「没」は「無」と同意で、口語的な言い方。「巴鼻」は、根拠、理由、の意。

\*使姦邪：よこしまな行いをほしのままにすること。「使」は、勢いにものをいわせる、の意。

【通釈】

熙寧年間の初め、自分自身で常に上奏文を調べ、宰相の意向におもねつてご機嫌を取り、かくして御史の補佐役を務めていた人がいた。蘇軾はそれをからかつて次のように言った。「どんなもくろみがあつて富や名声を求めのか。わずかの根拠もなく邪悪な行いをほしのままにしている」と。「有甚意頭（どんなもくろみがあつて）」や、「没些巴鼻（わずかの根拠もなく）」は、どちらも俗語である。

二十六

某公用事、排斥端士、矯飾偽行。范蜀公詠僧房假山、  
「倏忽平爲險、分明假奪真」。蓋刺之也。

【訓読】

某公 事を用ひて、端士を排斥し、偽行を矯飾す。范  
蜀公 僧房の假山を詠ずるに、「倏忽に 平 険と為り、  
分明に 仮 真を奪ふ」と。蓋し之を刺るならん。

【語釈】

- \* 用事：権力をふるうこと。
- \* 端士：品行方正の士。
- \* 矯飾：うわべを飾ること。
- \* 范蜀公：北宋・范鎮のこと。晩年に蜀郡公に封ぜられたので、そう呼ばれる。
- \* 假山：庭などに人工的に作られた鑑賞用の小山。築山。
- \* 「倏忽」の二句：『全宋詩』卷三四六には、本節を出典として、この二句のみを収録する。「倏忽」は、たちまち、の意。「分明」は、あきらかなこと。「假」は、偽物、の意。ここでは、「假山」の「假」の字を踏まえて言う。

【通釈】

あるお偉方が権力をふるって清廉の人士を排除し、不  
誠実な振る舞いをうわべを飾ってごまかしていた。范鎮

は僧房の築山を詠じた詩の中で、次のように言った。  
「あつという間に平らな土地が険しい山となった。明らかに偽物が本物を奪い取ってしまったのだ」と。思うに、この事を風刺しているのであろう。

二十七

魯直謂荆公之詩、暮年方妙。然格高而體下。如云「似  
聞青秧底、復作龜兆坼」、乃前人所未道。又云「扶輿  
度陽燄、窈窕一川花」、雖前人亦未易道也。然學二謝  
失于巧爾。

【訓読】

魯直 謂へらく 荆公の詩、暮年 方に妙なり。然れ  
ども格は高きも体は下なり。「聞くに似たり 青秧の底  
に、復た龜兆の坼を作すを」と云ふが如きは、乃ち前人  
の未だ道はざる所なり。又た「扶輿 陽焰に度れば、窈  
窕たり 一川の花」と云ふは、前人と雖も亦た未だ道ふ  
に易からざるなり。然れども二謝に学び、巧に失するの  
み、と。

【語釈】

\*魯直：北宋・黃庭堅のこと。魯直はその字。

\*荆公：北宋・王安石のこと。晩年に荆国公に封ぜられた。

\*格高而體下：「格」は、詩文の格調、詩文に表れる勢い。「體」は、詩文という形となって表れた作者の個性・風格を言う。スタイル、文体の意。戸田浩暁著『文心雕龍』（明治書院、新釈漢文大系、一九七八年、下冊四一六頁）には、「体とは作家の性格がその作品を読む者にはつきりと感じられるような文章の肌合い、即ち文体のことである。」とあり、荒井健・興膳宏著『文学論集』（朝日新聞社、中国文明選、一九七七年、六頁）には、「体」は、「おおむね個人もしくは時代様式に当るが、詩の形式・形態をさして用いられた例もある」とある。

ちなみに、後の時代になるが、南宋・嚴羽の『滄浪詩話』に、以下のように言う。——詩之法有五。曰體製、曰格力、……。「詩の法に五有り。體製と曰ひ、格力と曰ひ、……」。——市野沢寅雄氏は、「體製」について、「体制・体裁・体格・体、みな類語でからだのできに譬喩を取った言い方。詩のからだにつき、ほねぐみ。作家の性情、性格の特徴、素養それには時代の文学上の趨勢、需要が自然に詩人の作風に特色を持たせる。」と注し、「各人各人の詩の製作風」と訳す。また「格力」については、「前述の体製を表面に持ち出す力。内面の詩情にも語の出し方、使う字の強さ弱さにも見られる。」と注し、「発想や用語の重力」と訳す（『滄浪詩話』明德出版社、一九七六年、三十四〜三十五頁）。

\*「似聞」の二句：王安石の五言古詩「寄楊德逢」詩の一節。『全宋詩』卷五三八では、「似聞」を「遥聞」に作る。

\*龜兆坼：龜の甲羅に焼きこけてあて、そのひび割れによって占うこと。「坼」は、ひび、裂け目。引用の二句の次の句に、「占歲以知子（歲

を占ひて以て子あるを知る）」とあることから、ここでは豊作の占いを言うのであろう。

\*「扶輿」の二句：王安石の五言古詩「法雲」詩の一節。

\*扶輿：つむじ風。

\*陽燄：水際にたつ陽炎。

\*窈窕：なまめかしいさま。

\*一川花：川面一面に浮かぶ花。

\*二謝：南朝宋・謝靈運と謝惠連を指す。南朝宋の頃の詩風が新奇を競うものであったことについては、南朝梁・劉勰の『文心雕龍』「明詩」篇に以下のように言う。——宋初文詠、體有因革。壯老告退、而山水方滋。儷采百字之偶、爭價一句之奇。情必極貌以寫物、辭必窮力而追新。此近世之所競也。「宋初の文詠、体に因革有り。壯老退を告げ、山水方に滋し。采を百字の偶に儷べ、価を一句の奇に争ふ。情は必ず貌を極めて以て物を写し、辞は必ず力を窮めて新を追ふ。此れ近世の競ふ所なり」。——

【通釈】

黃庭堅が評して言うには、王安石の詩は、晩年になつてまさに絶妙なものとなつた。しかしながら、格調は高いものの独自の作風という点では劣る。「青々とした苗のあたりから、農民たちがまた龜の甲にひびを入れて豊作の占いをしている音が聞こえてくるようだ」というような句は、実に先人が今まで口にしたことのないものである。また、「つむじ風がかげろうの立つ水際に吹き渡れば、散り落ちた花びらが川面一面に美しく浮かぶ」という句

などは、先人であつても、言い表すのは容易ではないであらう。しかしながら、古詩の作法については、謝靈運や謝惠連に学んでおり、技巧に走るぎらいがある、と。

二十八

蘇詩始學劉禹錫。故多怨刺。學不可不慎也。晚學太白。至其得意、則似之矣。然失于粗、以其得之易也。

【訓読】

蘇の詩 始め劉禹錫に学ぶ。故に怨刺多し。学ぶには、慎まざるべからざるなり。晚に太白に学ぶ。其の意を得るに至れば、則ち之に似たり。然れども粗に失するは、其の之を得ることの易きを以てなり。

【語釈】

\* 劉禹錫：唐の詩人。柳宗元らとともに王叔文の政治改革に加わるも、叔文の失脚にともない地方に左遷された。

\* 怨刺：自らの不遇を怨み、政治を諷刺すること。

\* 太白：唐・李白のこと。太白はその字。

【通釈】

蘇軾の詩は、初め劉禹錫に学んだ。それゆえ、不遇の怨みや政治を風刺したものが多いのである。学ぶにあ

たっては、慎重でなければならぬ。また晩年に李白に学んだ。その真意を会得した場合には、李白に似たものができた。しかしながら粗雑さを免れなかつたのは、安易にそれを自分のものにしてしまつたからである。

二十九

王荆公暮年喜爲集句。唐人號爲四體。黃魯直謂正堪一笑爾。

司馬温公爲定武從事。同幕私幸營妓、而公諱之。嘗會僧廬。公往迫之、使妓踰牆而去、度不可隱、乃具道。公戲之曰、「年去年來來去忙、暫偷閒臥老僧牀、驚回一覺遊仙夢、又逐流鶯過短牆」。

又杭之舉子中老榜第、其子以緋裹之。客賀之曰、「應是窮通自有時、人生七十古來稀、如今始覺爲儒貴、不著荷衣便著緋」。

壽之醫者、老娶少婦。或嘲之曰、「假他門戶傍他牆、年去年來來去忙、采得百花成蜜後、爲他人作嫁衣裳」。

眞可笑也。

【訓読】

王荊公 暮年に喜みて集句を為る。唐人 号して四体と為す。黄魯直 謂へらく、正に一笑に堪ふるのみ、と。

司馬温公 定武の従事と為る。同幕 私かに宮妓を幸み、而して公 之を諱む。嘗て僧廬に会す。公 往きて之に迫るに、妓をして牆を踰えて去らしめんとするも、隠すべからざるを度り、乃ち具さに道ふ。公 之に戯れて曰く、「年去り年来たりて 来去に忙し、暫く間を偷みて臥す 老僧の牀、驚き回りて一たび覚む 遊仙の夢、又た流鶯を逐ひて短牆を過ぐ」と。

又た杭の拳子 老榜の第に中る。其の子 緋を以て之を裏む。客 之を賀して曰く、「応に是れ 窮通 自から時有るべし、人生七十 古来 稀なり、如今 始めて儒たることの貴きを覚ゆ、荷衣を著けずして 便ち緋を著く」と。

寿の医者、老いて少婦を娶る。或ひと之を嘲りて曰く、「他の門戸に俛り 他の牆に傍ふ、年去り年来たりて 来去に忙し。百花を采り得て 蜜を成すの後、他人の為に 嫁の衣裳を作る」と。真に笑ふべきなり。

【語釈】

\* 王荊公：北宋・王安石のこと。晩年に荊国公に封ぜられた。

\* 集句：先人の詩句を集めて詩や詞を作ること。

\* 四体：集句詩の別称。

\* 黄魯直：北宋・黄庭堅。魯直はその字。

\* 司馬温公：北宋・司馬光のこと。死後、温国公を贈られた。

\* 定武従事：「定武」は、定武軍。軍は宋代の行政区域の称の一つ。河北省定興のあたり。「従事」は、官名。州郡の長官が招致する僚属の官。

\* 同幕：同僚のこと。

\* 宮妓：兵營に配属されている官妓。

\* 私幸：ひそかに寵愛すること。

\* 「年去」の四句：司馬光の「集句詩」と題された七言絶句。

\* 「年去」の句：唐・鄭谷の七言律詩「燕」詩の冒頭の句から得ている。

\* 「暫偷」の句：唐・鄭谷の七言絶句「定水寺行春」詩の結句から得ている。

\* 「驚回」の句：北宋・魏野の七言絶句「謝知府寇相公降訪」詩の転句から得ている。「驚回」は、はつと我に返ること。眠りから覚めること。

\* 「遊仙夢」は、仙界に遊ぶ夢。ここでは、特に仙女とともに歡樂の時を過ごす夢を指すであろう。ちなみに、唐・張鷟に、神仙の窟に迷い込んだ男が、そこで出会った二人の仙女と歡樂の時を過ごし、ついにはそのうちの一人と結ばれるといった筋の『遊仙窟』という名の伝奇小説がある。

\* 「又逐」の句：唐・鄭谷の七言律詩「燕」詩の末尾の句から得ている。「流鶯」は、枝から枝へ飛び移って鳴く鶯。ここでは、妓女を比喩する。

\* 擧子：科擧の受験者。

\* 杭：地名。杭州（浙江省杭州市）のこと。

\* 中老榜第：七十歳を越えて科擧に合格すること。元・辛文房の『唐才子傳』卷十「曹松」の条に以下のようにある。——與王希羽・劉象・柯崇・鄭希顔同登第。年皆七十餘。號爲「五老榜」。（王希羽・劉象・



柯崇・鄭希顔と同一に登第す。年 皆な七十余りなり。号して「五老榜」と為す。——ちなみに、七十歳は、一般には官職をやめて引退する、いわゆる「致仕」の年齢とされていた。

\*「緋・赤いねりぎぬ。ここでは、五品の官吏が着る服を指して言う。

\*「應是」の句：冒頭の二字が異なるが、おそらく北宋・徐績の七言律詩

「和呂秘校十首」其十の冒頭の句、「吾道窮通自有時」から得ていよう。

\*「人生」の句：唐・杜甫の七言律詩「曲江二首」其二の第四句から得ている。

\*「如今」の二句：後半の二句は、集句ではなく、自作の句であろう。「荷衣」は、はずの葉で編んだ衣服。隠者の服を象徴する。

\*「壽」地名。寿州(安徽省寿县)のこと。

\*「偃他」の句：唐・李山甫の七言絶句「柳十首」其五の承句に、「傍他門戸倚他樓」という類似の句があり、北宋・王安石の七言絶句「急足集句」の承句に、「倚他門戸傍他牆」と、ほぼ同じ句がある。「偃」

「傍」は、頼る、の意。「偃他門戸」「傍他牆」は、いずれも他人を頼ることを比喩する。ここでは、寿州の医者が他家に赴いて診察することを生計を立てていたことを言う。

\*「年去」の句：唐・鄭谷の七言律詩「燕」詩の冒頭の句から得ている。

ちなみに、北宋・石延年の七言絶句「偶成」詩の起句、北宋・王安石の七言絶句「急足集句」の起句にも見える。

\*「采得」の句：唐・羅隱の七言絶句「蜂」詩の転句から得ている。「采得百花」は、蜂が多くの花から蜜を集めるように、あくせく働くさまを比喩する。「成蜜」は、働いた結果、お金がたまるところを比喩する。

\*「爲他」の句：唐・秦韜玉の七言律詩「貧女」の末尾の句から得ている。また、北宋・石延年の七言絶句「偶成」詩の承句にも見える。「爲他人作嫁衣裳」は、他人のために骨を折り、自分の利益にはならない

ことを比喩する。「爲人作嫁」と四字の成語としても用いられる。ここでは、寿州の医者が、自分の結婚が決まるまでの間、あくせく稼いで貯めた金で、いつも他人のために花嫁衣裳を作ってやっていたことをからかって言う。あるいは、前の句の「成蜜」を、自らの結婚が成立したことの比喩と捉え、「これからは他人のために花嫁衣裳を作ってやれるね」という方向で解釈できるかもしれない。ただし、その場合、この句が一般に含み持つ「他人のために骨を折り、自分の利益にならないこと」といった意味合いが失われることになる。

【通釈】

王安石は、晩年になって好んで集句を作った。唐代の人々は、それを四体と呼んでいた。黄庭堅が評して言うには、一笑すべきものにすぎない、と。

司馬光は、定武軍の従事となった。ある同僚がひそかに妓女を寵愛し、司馬光はこのことを忌み嫌っていた。ある時、同僚は僧侶の庵でひそかに妓女と会っていた。司馬光はそこへ行って詰め寄ろうとしたので、同僚は妓女を垣根越しに逃がそうとしたが、隠すことができないと観念し、やむなく一々言い訳をした。司馬光は同僚をからかって詠った。「一年が過ぎ去りまた新しい年がやって来て、行ったり来たりと忙しい。しばしの間、ひまをぬすんで老僧の寢床に身を横たえる。はつと我に返り仙界に遊ぶ夢から目覚めると、また今度は慌ただしく鶯を

追いかけ、低い垣根を飛び越える」と。

また杭州の科挙の受験者で、七十歳を越えてから及第した者がいた。その子供が、彼の身を官吏が着る緋色の衣服で包んだ。客がそれを祝つて次のように詠った。「きつと困窮と栄達にはそれぞれ時運というものがあるのだろう。人の一生で七十歳を迎えられる人は、古来まれである。今やつと儒者であることの高貴さが分かった。はすの衣を脱いで、すぐさま緋色の官服に着替えてみる」と。

寿州の医者で、年老いてから若い妻をもらつた者がいた。ある人がそれをからかつて言った。「あなたは人々の家に足繁く診察に訪れては生計を立てていた。一年が過ぎ去りまた新しい年がやつて来て、来る日も来る日も行つたり来たりと忙しく働いた。あたかも蜜蜂がたくさんの花から蜜を集めて来るかのように、あくせく稼いでお金をためては、いつも他人のために花嫁衣装を作つてあげていたね。」と。本当におかしな話である。

三十

熙寧初、外學置官師。職簡地親、多在幕席。徐有學

官喜諛語。同府苦之、詠蠅以刺之曰、「衣服有時遭點染、盃盤無日不追隨」。

【訓読】

熙寧の初め、外學に官師を置く。職は簡にして地は親しく、多く幕席に在り。徐に學官の諛語を喜むもの有り。同府 之を苦とし、蠅を詠じて以て之を刺りて曰く、「衣服 時に点染に遭ふ有り、盃盤 日として追隨せざる無し」と。

【語釈】

- \*熙寧：北宋・神宗の年号。
- \*外學：宋代に太学とは別に設置された学校。
- \*官師：役所の長をいう。
- \*地親：その土地が馴染みのあること。外學の長官には、その地に馴染みのある者が就任したことをいう。
- \*在幕席：役所のとばりの奥座敷に在ること。ここでは、実務のない形式的な顧問役であることをいう。
- \*徐：今の江蘇省徐州市。ちなみに陳師道は、元祐年間の初めに徐州教授の職にあつた（『宋史』巻四四四「文苑六・陳師道伝」）。
- \*學官：官學の學務をつかさどる官員および教官。教授、學正、教諭などを総じて言ふ。
- \*諛語：ののしり責めること。
- \*同府：役所の同僚。
- \*時：しばしば、しよつちゅう、の意。

\* 點染：点々と染みをつけること。

【通釈】

熙寧年間の初め、(太学とは別に設けられた)学校に長官を置いた。職務は簡素で、その地に馴染みのある者が就任し、その多くは帷の中にいる顧問役であった。徐州に人をのしることが好きな教官がいた。ある同僚がそれを苦に病んで、蠅を詠った詩を作り、彼をそしつて次のように言った。「服に点々と染みをつけられることがしばしばあり、杯や皿につきまとわれない日はない」と。

三十一

唐人不學杜詩。惟唐彦謙與今黃亞夫庶・謝師厚景初學之。魯直、黃之子、謝之婿也。其于二父、猶子美之于審言也。然過于出奇、不如杜之遇物而奇也。三江五湖、平漫千里、因風石而奇爾。

【訓読】

唐人 杜詩に学ばず。惟だ唐彦謙と今の黄亞夫庶、謝師厚景初のみ之に学ぶ。魯直は黄の子にして、謝の婿なり。其の二父に于けるは、猶ほ子美の審言に于けるがこ

ときなり。然れども奇を出だすに過ぎ、杜の物に遇ひて奇なるに如かざるなり。三江五湖、平漫なること千里、風石に因りて奇なるのみ。

【語釈】

- \* 唐彦謙：唐・昭宗の頃の人。字は茂業、鹿門先生、陶穀と号した。
- \* 黄亞夫庶：北宋・黄庶のこと。亜夫はその字。黄庭堅の父。
- \* 謝師厚景初：北宋・謝景初のこと。師厚はその字。黄庭堅の舅。
- \* 魯直：北宋・黄庭堅のこと。魯直はその字。
- \* 子美：唐・杜甫のこと。子美はその字。
- \* 審言：杜甫の祖父、杜審言のこと。
- \* 三江五湖：江蘇省と浙江省の境、太湖一帯の水郷地帯。
- \* 平漫：平らに広がること。
- \* 風石：風と岩。自然の事物を象徴する。

【通釈】

唐の人は杜甫の詩に学ばなかった。ただ晩唐の唐彦謙と今の時代の黄庶、謝景初のみが杜甫の詩に学んだ。黄庭堅は、黄庶の子で、謝景初の婿である。黄庭堅と二人の父との関係は、ちょうど杜甫と祖父の杜審言との関係のようなものである。しかし、黄庭堅は新奇な句を生み出そうと意識しすぎており、杜甫が事物に接しておのずと奇抜な句を作り出すのには及ばない。太湖一帯の水郷地域は、千里四方に平らに広がっており、ただそよ吹く風とその地にある岩などの自然の事物によって、おのず

と奇抜な景色を生み出しているのである。

三十二

謝師厚廢居於鄧。王左丞存、其妹婿也。奉使荆湖、枉道過之。夜至其家。師厚有詩云、「倒著衣裳迎戶外、盡呼兒女拜燈前」。

【訓読】

謝師厚 居を鄧に廢す。王左丞存は、其の妹婿なり。使ひを荆湖に奉じ、道を枉げて之に過ぎる。夜 其の家に至る。師厚 詩有りて云ふ、「倒さかまに衣裳さかを著けて戸外に迎へ、尽く兒女を呼びて灯前に拜せしむ」と。

【語釈】

- \* 謝師厚：謝景初のこと。師厚はその字。第三十一節を参照。
- \* 廢居：官職を離れ閑居すること。
- \* 鄧：今の河南省鄧県。
- \* 王左丞存：北宋・王存のこと。仁宗の慶曆六年の進士。兵部尚書、尚書右丞、尚書左丞などを歴任した。
- \* 荆湖：今の湖北省の南部から湖南省にかけての一带の地。
- \* 「倒著」の二句：『全宋詩』卷五一八は、本節を出典として、この二句のみを収録する。
- \* 倒著衣裳：慌てているさまをいう。「倒著」は、逆さまに身につけること。

と。「衣」は、上半身に身につける服。「裳」は、下半身に身につける服。『詩経』齊風「東方未明」に、未明に慌てて朝廷に駆けつける人士の様子を描いた、以下の句を踏まえていよう。——東方未明、顛倒衣裳。（東方 未だ明けざるに、衣裳を顛倒す）。——

\* 「盡呼」の句：この句の情景は、唐・杜甫の「贈衛八處士」詩に詠われる以下の情景に似ていよう。——今夕復何夕、共此燈燭光、……、昔別君未婚、兒女忽成行、怡然敬父執、問我來何方。（今夕 復た何の夕べぞ、此の灯燭の光を共にす、……、昔 別れしとき 君 未だ婚せざるに、兒女 忽ち行を成す、怡然として父の執ととを敬ひて、我に問ふ 何れの方より來たと。——

【通釈】

謝景初は、鄧に隱居した。尚書左丞の王存は、謝景初の妹の婿であった。皇帝の命を受けて荆湖に使いすることになり、回り道をして謝景初の家に立ち寄ることにした。夜になりその家にたどり着いた。その時の謝景初の詩に次のように言う。「服を逆さまに身につけ、慌てて戸外に出迎え、子供たち全員を呼びつけ、灯火の前でお辞儀をさせる」と。

三十三

世稱杜牧「南山與秋色、氣勢兩相高」爲警絶。而子美才用一句、語益工。曰、「千崖秋氣高」也。

【訓読】

世 杜牧の「南山と秋色と、氣勢 両つながら相ひ高し」を称へて警絶と為す。而れども子美は才かわすに一句を用ひて、語は益ます工たくみなり。曰く、「千崖 秋氣 高し」と。

【語釈】

\*「南山」の二句：唐・杜牧の五言絶句「長安秋望」詩の転句と結句。「秋色」は、秋の澄んだ景色。ここでは特に空の高さをいう。「氣勢」は、たたくまい、様子、おもむき、の意。

\*警絶：群を抜いてすばらしいこと。

\*「千崖」の句：唐・杜甫の五言排律「王閬州筵奉酬十一舅惜別之作」詩の冒頭の句。「千崖」は、たくさんたくさんの崖。「秋氣」は、秋の澄んだ気配。ここでは、特に高く澄んだ空をいう。

【通釈】

世間の人々は、杜牧の「南山と秋の空の色と、どちらも高々と感じられる」という句を、群を抜いてすばらしいと称賛している。しかし、杜甫はわずかに一句を用いるだけで（同様の情景を詠い）、言葉はいつそう巧みである。その句に次のように言う。「切り立ついくつもの崖の上に、澄んだ秋の空が高く広がっている」と。

三十四

魯直有癡弟。畜漆琴而不御、蟲蝨入焉。魯直嘲之曰、「龍池生壁蝨」。而未な有對。魯直之兄大臨、且見牀下以溺器畜生魚。問知其弟也、大呼曰、「我有對矣」。乃「虎子養溪魚」也。

【訓読】

魯直に痴弟有り。漆琴を畜たくわふるも御せず、虫蝨焉これに入る。魯直之を嘲りて曰く、「龍池に壁蝨を生ず」と。而れども未だ対つひ有らず。魯直の兄大臨、且あしたに牀下に溺器を以て生魚やしなを畜たくわふるを見る。問ひて其の弟たるを知るや、大呼して曰く、「我わがに対つひ有り」と。乃ち「虎子に溪魚を養ふ」なり。

【語釈】

\*魯直：黃庭堅のこと。魯直はその字。

\*漆琴：漆塗りの琴。

\*御：琴を弾くこと。

\*龍池：琴の底板には、龍池と鳳沼と呼ばれる二つの穴が開けられている。

\*大臨：黃庭堅の兄、黃大臨のこと。字は元明。詩八首が現存する。

\*溺器：尿器。おまる。

【通釈】 \*虎子：「溺器」に同じ。「龍池」と対にするため「虎子」と言った。

黄庭堅に智恵遅れの弟がいた。漆塗りの立派な琴を持ちながら弾くこともなく、虫がわいてしまった。黄庭堅は弟をからかかって言った。「琴の龍池に虫がわいた」と。しかし対となる句がまだ出来ないでいた。黄庭堅の兄の黄大臨が、ある朝、寝台の下のおまるの中に、生きた魚が飼われているのを目にした。尋ねて弟の仕業だと分かると、大きな声で「対句が浮かんだぞ」と叫んだ。その句はなんと「虎子おまるに谷川の魚を飼っている」というものであった。

三十五

歐陽公謫永陽。聞其倅杜彬善琵琶、酒間取之。杜正色盛氣而謝不能。公亦不復強也。後杜置酒數行、遽起還内。微聞絲聲。且作且止而漸近。久之、抱器而出。手不絕彈、盡暮而罷。公喜甚過所望也。故公詩云、「座中醉客誰最賢、杜彬琵琶皮作絃、自從彬死世莫傳」。皮絃世未有也。

【訓読】

歐陽公 永陽に謫せらる。其の倅せきの杜彬 琵琶を善くするを聞き、酒間に之を取らしむ。杜 色を正し気を盛んにして能はずと謝す。公も亦た復た強ひざるなり。後に杜 置酒すること數行、遽かに起ちて内に還る。微かに糸の声を聞く。且つ作おこり且つ止みて漸く近し。之を久くして、器を抱きて出づ。手は弾くを絶やさず、暮れを尽くして罷む。公 甚だ望む所に過ぐるを喜ぶなり。故に公の詩に云ふ、「座中の醉客 誰か最も賢なる、杜彬の琵琶 皮もて絃を作る、彬の死してより 世に伝ふる莫し」と。皮の絃は世に未だ有らざるなり。

【語釈】

- \* 歐陽公：北宋・歐陽脩のこと。
- \* 謫：左遷されること。
- \* 永陽：安徽省来安県。
- \* 倅：副官のこと。
- \* 正色：真剣な顔つきになること。
- \* 盛氣：怒気を示すこと。
- \* 置酒數行：「置酒」は、酒盛りをすること。「行」は、杯を酌み交わす回数を表す量詞。
- \* 「座中」の三句：歐陽脩の雜言古詩「贈沈博士歌」の一節。詩題を「醉翁吟」に作るテキストもある。「座中」の句は、唐・白居易「琵琶行」の以下の句を意識していよう。——座中泣下誰最多、江州司馬

青衫濕。〔座中 泣下ること 誰か最も多き、江州の司馬 青衫濕ふ。〕

\*皮弦・琴や琵琶の弦は、ふつう絹糸を撚って作られる。

【通釈】

欧陽脩は永陽に左遷された。その副官の杜彬が琵琶がうまいことを耳にし、酒宴の席で琵琶を手に取らせようとした。すると杜彬は真顔になって憤りの色を示し、できないと断つた。欧陽脩もまた無理強いしなかった。後に杜彬は、数回ほど杯を酌み交わすと、突然立ち上がり、奥の方に帰っていった。すると、かすかに琵琶の音色が聞こえてきた。その音は鳴つたりやんだりを繰り返しながら、しだいに近づいてきた。しばらくして、杜彬が琵琶を抱えて出てきた。その手は休むことなく弾き続け、日が暮れたところでやめた。欧陽脩は望んでいた以上のもてなしに喜んだ。だから欧陽脩の詩に次のように言う。「酒席の酔った客人の中で誰が最も優れているか。杜彬の琵琶は皮で弦を作っていた。杜彬が死んでからというもの、世間に伝わることはなくなった」と。皮の弦は、世間ではいまだ目にするのではない。

三十六

尚書郎張先善著詞。有云「雲破月來花弄影」、「簾幕捲花影」、「墮輕絮無影」。世稱誦之、號張三影。〔校〕王介甫謂、「雲破月來花弄影」、不如李冠「朦朧澹月雲來去」也。冠齊人。爲「六州歌頭」、道劉項事、慷慨雄偉。劉潛大俠也。喜誦之。

【校異】

校一：「之」の字は、もと「云」の字に作り、「號」の字は脱落していた。適園本によって改めかつ補う。

【訓読】

尚書郎の張先 善く詞を著す。「雲 破れ 月 来たりて 花 影を弄ぶ」、「簾幕 花影を捲く」、「輕絮を墮として 影 無し」と云ふ有り。世 称へて之を誦し、張三影と号す。王介甫 謂へらく、「雲 破れ 月 来たりて 花 影を弄ぶ」は、李冠の「朦朧たる澹月 雲 来去す」に如かざるなりと。冠は齊の人なり。「六州歌頭」を為り、劉項の事を道ひて、慷慨雄偉たり。劉潛は大俠なり。喜みて之を誦す。

【語釈】

\*張先：字は、子野。仁宗の天聖八年（一〇三〇）の進士。詞の作者として知られる。

\*「雲破」の句：「天仙子」詞の一節。『全宋詞』（第一冊七十頁）は、以下の小題を付す。——時爲嘉禾小倅、以病眠不赴府會。（時に嘉禾の小倅たり、病を以て眠り府会に赴かず）。——張先は当時、嘉禾判官の任にあつた。

\*「簾幕」の句：「歸朝歡」詞の一節。『全宋詞』（第二冊六十四頁）では、「簾押殘花影」に作り、「一作「簾幕卷花影」とある。

\*「墮輕絮」の句：「翦牡丹」詞の一節。『全宋詞』（第一冊七十九頁）は、以下の小題を付す。——舟中聞雙琵琶。（舟中にて双琵琶を聞く）。——ただし、「墮」を「墜」に作る。

\*王介甫：北宋・王安石のこと。介甫はその字。

\*李冠：齊州歷城（山東省濟南市）の人。進士に推挙されたが、合格しなかった（『宋史』卷四四二「文苑伝四」）。

\*「滕朧」の句：「蝶恋花」詞の一節。『全宋詞』（第一冊一四頁）。なお、『全宋詞』（第一冊五四〇頁）は、『陽春白雪』から賀鑄の「蝶恋花」を輯録しているが、そこにも同じ句が見える。

\*「六州歌頭」：詞牌の一つ。李冠の「六州歌頭」詞は二首あり、いずれも『全宋詞』第一冊一四頁に収録されている。

\*劉項：秦末に天下を争った漢の劉邦と楚の項羽のこと。李冠の「六州歌頭（秦亡草昧）」詞は、劉邦と項羽の争いを詠う。

\*劉潛：字は仲方。曹州定陶（山東省荷沢県）の人。好んで古文を作り、進士によって起家し、蓬萊県の知事などに就任した（『宋史』卷四四二「文苑伝四」）。また、『宋史』卷三三三「張揆伝」に以下のように言う。——揆……少從劉潛・李冠游。（揆……少くして劉潛・李冠に従ひて遊ぶ）。——これより、劉潛と李冠の間に交流関係があつたこ

とが窺える。

【通釈】

尚書郎の張先は、詞を作るのが上手かつた。「雲が破れて月が現れ、花は影を地に映す」、「簾幕がそこに映る花の影を捲きこみながらあがる」、「柳の綿は枝から落ちて影もなく軽やかに舞う」という句がある。世間の人々は称賛して口々にそれらの句を唱え、彼のことを張三影と呼んだ。王安石が評して言うには、「雲が破れて月が現れ、花は影を地に映す」の句は、李冠の「淡くぼんやりとした月に、雲が行き来する」の句には及ばない、と。李冠は齊の人である。「六州歌頭」の詞を作り、劉邦と項羽の事を詠い、高ぶる気持ちを描かれた雄壮な作であつた。劉潛は非常に男気のある人であつた。好んでその詞を口ずさんだ。

三十七

往時青幕之子婦、妓也。善爲詩詞。同府以詞挑之。妓答曰、「清詞麗句、永叔子瞻曾獨歩、似恁文章、寫得出來當甚強」。



【訓読】

往時の青幕の子婦は、妓なり。善く詩詞を為る。同府詞を以て之に挑む。妓答へて曰く、「清詞麗句、永叔子瞻曾て独歩す。恁くの似き文章、写し得て出で来たれば、当に甚だ強るべし」と。

【語釈】

\*青幕：宴席に張られた黒い漆を塗ったとばり。

\*「清詞」の四句：「句」と「歩」、「章」と「強」で押韻する。『全宋詞』第一冊五九二頁は、この詞の詞牌を「減字木蘭花」とする。「永叔」は、北宋・歐陽脩のこと。永叔はその字。「子瞻」は、北宋・蘇軾のこと。子瞻はその字。「似恁」は、このように、の意。「強」は、優れる、の意。

【通釈】

むかし、青いとばりを張った宴席に待る女性は、妓女であつた。詩や詞を作るのがうまかつた。ある同僚が詞を作つて挑戦した。妓女はそれに答えて、次のような詞を作つた。「清らかな言葉や麗しい句は、歐陽脩と蘇軾がかつては抜きん出ておりました。このような文章が書けたなら、さぞかし素晴らしいことでしょうにね」と。

三十八

黄詞云、「斷送一生惟有、破除萬事無過」。蓋韓詩有

云「斷送一生惟有酒」、「破除萬事無過酒」、才去一字、遂為切對。而語益峻。

又云、「杯行到手更留殘、不道月明人散」。謂思相離之憂、則不得不盡。而俗士改爲「留連」、遂使兩句相失。正如論詩云、「一方明月可中庭」、「可」不如「滿」也。

【訓読】

黄の詞に云ふ、「一生を斷送するに惟だ有るのみ、万事を破除するに過ぐる無し」と。蓋し韓の詩に「一生を斷送するに惟だ酒有るのみ」、「万事を破除するに酒に過ぐる無し」と云ふ有り、才かに一字を去りて、遂に切對と為すならん。而して語は益ます峻なり。

又た云ふ、「杯行りて手に到れば、更に留殘せんや、月明らかにして、人散ずと道はざらんや」と。相ひ離るるの憂ひを思へば、則ち尽くさざるを得ざるを謂ふ。而れども俗士、改めて「留連」と為し、遂に兩句をして相ひ失せしむ。正に詩を論じて、「一方の明月、中庭に可し」は、「可」は「滿」に如かず、と云ふが如きなり。

【語釈】

\*黄詞：北宋・黄庭堅の詞のこと。  
\*「斷送」の二句：北宋・黄庭堅の「西江月」詞（『全宋詞』第一冊四〇）

○頁)の一節。詞牌の下に以下の小題がある。——老夫既戒酒不飲。遇宴集、獨醒其旁。坐客欲得小詞、援筆爲賦。「老夫、既に酒を戒め飲まず。宴集に遇ひ、独り其の旁に醒む。坐客、小詞を得んと欲すれば、筆を援きて爲に賦す」。——「斷送」は、時間を過ごす、の意。「破除」は、取り除く、の意。

\*韓詩：唐・韓愈の詩のこと。

\*「斷送」の句：唐・韓愈の七言絶句「遣興」詩の起句。

\*「破除」の句：唐・韓愈の七言古詩「贈鄭兵曹」詩の末尾の句。

\*才去一字：「才」は、わずかに、の意。「去」は、黄庭堅が韓愈の詩句の末尾一字を除いて対句にしていることを言う。このような句末の言葉をわざと省略して、そこにあてはまる言葉を読み手に判断させる言葉遊びを歇後語という。

\*切對：精巧な対句。

\*峻：ひきしまること。

\*「杯行」の二句：「斷送」の二句と同じく、北宋・黄庭堅の「西江月」詞の一節。『全宋词』では、「更」を「莫」に、「月明」を「月斜」にする。「更」であれば、ここでは反語を表す副詞として解釈することになる。「不道」は、ここでは反語で、思わないことがあるか、の意。

\*留連：立ち去ろうとしないさま。居続けること。

\*「一方」の句：唐・劉禹錫の七言絶句「生公講堂」詩の結句。「空の彼方に浮かぶ明るい月は中庭の景色に相応しい」という意。「一方」は、彼方、の意。

【通釈】

黄庭堅の詞に次のように言う。「一生をともし過ごすものとしては、ただこれがあるだけ、よろずの煩わしい事

を取り除くものとしては、これにまさるものはない」と。韓愈の詩に「一生をともし過ごすものとしては、ただ酒があるだけ」、「よろずの煩わしい事を取り除くものとしては、酒にまさるものはない」という句があり、おそらく黄庭堅は、そこからわずかに一字ずつを取り去って、そのまま精巧な対句に仕立て上げたのであろう。それでいて言葉はますますひきしまったものとなっている。

さらに同じ詞に次のように言う。「杯が巡り巡って私の手に至れば、それをどうして残せようか。(宴会が終われば)月明かりのもと人も解散してしまうことをどうして思わないでいられようか」と。(禁酒をしているとはいえず)離別の憂いを思えば、酒を飲み尽くさないわけにはいかない、ということをやっているのである。ところが詩文を解さぬ俗人が、「留殘」の二字を、居続けるという意味の「留連」の二字に改めてしまい、かくしてこの二句の味わいを台無しにしてしまったのだ。それはまさしく、詩を論じて、「一方明月可中庭」の句については、「可」の字を「滿」の字にした方がよい、と言うようなものである。

三十九

子瞻謂孟浩然之詩、韻高而才短、如造内法酒手而無材料爾。

【訓読】

子瞻 謂へらく、孟浩然の詩は、韻は高きも才は短なり。内法の酒を造るの手なるも材料無きが如きのみ、と。

【語釈】

\*子瞻：北宋・蘇軾のこと。子瞻はその字。

\*韻：風流な趣。

\*才：才覚。発想力。

\*短：不足する、の意。

\*内法酒：宮中の醸造法で造られた酒。

\*手：技術、腕前。

【通釈】

蘇軾は孟浩然の詩を評して、次のように言った。趣は高尚であるが才覚に乏しい。まるで宮中で飲む酒を醸造する腕前がありながら、それを造るにふさわしい材料がないようなものである、と。

四十

魯直「乞猫」詩云、「秋來鼠輩欺猫死、窺甕翻盤攪夜眠、聞道狸奴將數子、買魚穿柳聘銜蟬」。雖滑稽而可喜。千載而下、讀者如新。

【訓読】

魯直の「猫を乞ふ」詩に云ふ、「秋來 鼠輩 猫の死するを欺り、甕を窺ひ 盤を翻して 夜眠を攪す。聞道らく 狸奴 数子を將ゆと。魚を買ひ 柳に穿ちて 銜蟬を聘かん」と。滑稽なりと雖も喜ぶべし。千載而下、読む者 新なるが如し。

【語釈】

\*魯直：北宋・黄庭堅のこと。魯直はその字。

\*狸奴：猫の異名。

\*買魚穿柳：魚を買って柳の枝に刺し通すこと。

\*銜蟬：猫の異名。

【通釈】

黄庭堅の「猫を乞う」詩に次のように言う。「秋になつて鼠たちは猫が死んだのをよいことに、かめの中を覗いたり、大皿をひっくり返したりして、私の夜の眠りを妨げる。聞くとところによれば、お宅の猫は数匹の子猫を引

き連れているとのこと。魚を買い求め、柳の枝に刺して、子猫をもらいに行きましよう」と。ユーモラスな詩ではあるが、好ましい。千年たつても、読む者は新鮮さを感じるであろう。

## 四十一

龍圖孫學士覺、喜論文。謂退之「淮西碑」、敘如『書』、銘如『詩』。

### 【訓読】

龍図の孫学士覺、喜みて文を論ず。謂へらく、退之の「淮西の碑」は、叙は『書』の如く、銘は『詩』の如し、と。

### 【語釈】

\*龍圖孫學士覺：北宋・孫覺のこと。北宋・哲宗のときに龍閣閣学士となった。ちなみに陳師道は、元祐年間の初めに、その文と行いとが蘇軾や孫覺らに推薦されたことによつて、徐州教授の職を得たといふ。

\*退之「淮西碑」：「退之」は、唐・韓愈のこと。退之はその字。「淮西碑」は、正確には「平淮西碑」といふ。「淮西」は、淮河の西方の地。唐は安史の乱以後、地方の統治を節度使や觀察使などの藩鎮にまかすに依存するようになった。それに伴い、藩鎮の中には唐朝の意向に逆らい、自らの権限・勢力の拡大のため反乱を起す者も現れた。

「淮西」もそのうちの一つであった。「平淮西碑」は、その地の藩鎮勢力を抑圧し、天下太平を実現した唐・憲宗の御世を頌えたもの。韓愈の代表作の一つとされる。「碑」は、文体の一つで、「序（叙）」と「銘」から成る。「銘」は、ふつう四言の韻文で書かれる。

\*『書』：儒教の經典の一つ、『書経』のこと。

\*『詩』：儒教の經典の一つ、『詩経』のこと。『詩経』は四言を基調とする。

### 【通釈】

龍閣閣学士の孫覺は、文を論じることが好んだ。彼が評して言うには、韓愈の「淮西の碑」は、叙の部分は『書経』のようであり、銘の部分は『詩経』のようである、と。

## 四十二

子瞻謂杜詩・韓文・顔書・左史、皆集大成者也。

### 【訓読】

子瞻 謂へらく、杜の詩、韓の文、顔の書、左の史、皆な集大成なる者なり、と。

### 【語釈】

\*子瞻：北宋・蘇軾のこと。子瞻はその字。第十一節にも、本節と同様の記述が見える。

\*杜詩：唐・杜甫の詩。

\*韓文：唐・韓愈の文。

\*顔書：唐・顔真卿の書。

\*左史：戦国時代・左丘明の歴史書、『春秋左氏伝』を指す。

【通釈】

蘇軾は以下のように評して言った。杜甫の詩、韓愈の文、顔真卿の書、左丘明の史は、いずれもそれぞれの分野における集大成である、と。

四十三

少游謂「元和聖德詩」、于韓文爲下。與「淮西碑」如出兩手。蓋其少作也。

【訓読】

少游 謂へらく、「元和聖德詩」は、韓の文に于いて下と為す。「淮西の碑」と両手より出づるが如し。蓋し其の少作ならん、と。

【語釈】

\*少游：北宋・秦觀のこと。少游はその字。

\*元和聖德詩：唐・韓愈の詩。一千二十四字から成る四言詩。「元和」は、

唐・憲宗の年号。「平淮西碑」と同様、藩鎮勢力の反乱を平定して、

天下太平を実現した唐・憲宗の御世を頌えたもの。ここで、「元和聖

德詩」と「平淮西碑」とが比較されているのは、「両作品が主題を同

じくしていることと、ともに四言の長篇から成り、様式面でも共通

性があるからであろう。

\*如出兩手：それぞれ別の手から生み出されたかのようだ、の意。同じ

人の作とは思えない、ということを喩える。

\*少作：若い頃の作品。

【通釈】

秦觀は次のように評して言った。「元和聖德詩」は、韓愈の詩文の中では出来の悪い部類に属する。「淮西の碑」とはまるで別の手から生み出されたかのようである。おそらく彼の若い頃の作品なのだろう、と。

四十四

王夫人、晁載之之母也。謂庶子功名貴富、有如韓魏公、而未有文事也。

【校異】

校一：「事」は、もと「士」に作る。適園本によつて改める。

【訓読】

王夫人は晁載之の母なり。謂へらく、庶子の功名貴富は、韓魏公の如き有るも、而れども未だ文事有らざるなり、と。

【語釈】

\*王夫人：北宋・晁載之の母。「夫人」は、正妻をいう。

\*晁載之：伝は未詳。その名前から、「蘇門の四学士」の一人とされる晁

補之の同世代の同族であることは確かであろう。また、年二十に満  
たない頃、黃庭堅にその文才を褒められたという。

\*庶子：妾腹の子。

\*韓魏公：北宋・韓琦のこと。仁宗のとき、樞密副使や中書門下平章事  
となり、魏国公に封ぜられた。

\*未有文事也：「文事」は、文化的な素養。ここでは、妾腹の子供たちに  
は文化的な素養がまだ備わっていない、ということを行うことによ  
って、我が子、晁載之の優秀さを暗に示しているであろう。

【通釈】

王夫人は晁載之の母である。彼女が評して言うには、  
妾腹の子供たちの功名や富貴なさまは、まるで韓琦のよ  
うだが、文化的な素養がまだ足りない、と。

四十五

退之作記、記其事爾。今之記乃論也。少游謂「醉翁  
亭記」亦用賦體。

【訓読】

退之の記を作るや、其の事を記すのみ。今の記は乃ち  
論なり。少游 謂へらく、「醉翁亭の記」も亦た賦の体を  
用ふ、と。

【語釈】

\*退之：唐・韓愈のこと。退之はその字。

\*記：文体の一種。事柄をありのままに記述するもの。

\*論：文体の一種。自分の意見を交えて論じるもの。

\*醉翁亭記：北宋・歐陽脩の滁州（安徽省滁県）知事時代の作品。醉翁  
亭という名の亭からの山水の眺めや、そこでの宴会のさまなどが記  
されている。

\*賦體：「賦」は文体の一種で、事柄を敷き並べてのべるもの。ここでは、  
四字句と六字句の対句を多用する駢儷体の賦を指している。歐陽  
脩の「醉翁亭記」は、駢儷体の賦に散文の句を混ぜ合わせるなどし  
て改変を加えた文体で記されている。

【通釈】

韓愈が「記」を作るにあたっては、その事柄を記すだ  
けであった。ところが、今の人の「記」は、自分の意見  
を交えた「論」になってしまっている。秦觀が評して言  
うには、歐陽脩の「醉翁亭の記」もまた、（本来の「記」  
の文体ではなく）「賦」の文体を用いている、と。

（次号に続く）